

ニュータウンの地域住民のつながりを生む 公園の活用についての研究

研究代表者：杉田香乃

共同研究者：小島敏央・佐野亜優花・谷口志保
西陽菜・栞田沙和

目次

- 第1章 研究の背景と目的
- 第2章 平城・相楽ニュータウンの特徴
- 第3章 公園を活用した多世代交流の実践と結果
- 第4章 地域のつながりづくりのための活かし方と課題

第1章 研究の背景と目的

赤澤(2020)によれば公園は社会的、経済的に健全で、身体的に健康で満たされた生活に貢献し、地域コミュニティの醸成等、都市が抱える様々な問題解決に関与できる都市インフラとして近年見直されている。一方で公園は人口減少や行政の厳しい財政状況により維持管理を担うことが困難になりつつある。また、長田(2014)によると近年地縁・血縁関係のように生活全体で関わるようなコミュニティは減少し、より部分的で選択可能なつながりが増加した。そのため、公園に対しつながりを生む自由な空間としての期待が高まっている。ニュータウンには豊かな自然やそれを楽しむことができる公園・歩行者専用道等が整備されている。このことから地域住民が公園を「自分たちのもの」として新たに利活用していくことによってつながりができると考えられる。

このため、我々は平城・相楽ニュータウン地区を例に、地域でつながりを生むための公園の活かし方やその課題について明らかにすることを目的とする。なお、本研究では文献調査の他、イベントの企画実施のプロセスや、イベントによる効果を明らかにするためのアクションリサーチを行った。

第2章 平城・相楽ニュータウンの特徴

2-1 研究対象の特徴

(1)平城・相楽ニュータウンの概況

本研究の調査対象である平城・相楽ニュータウンは、近鉄「高の原」駅を中心として奈良市、京都府の木津川市、精華町にまたがる613ha・計画人口7.3万人の大規模ニュータウンである。ニュータウンはS47(1972)年に奈良市右京地区で入居が開始され、2022年度にまちびらき50周年を迎えた。ニュータウンでは開発によって一斉に同世代が入居する傾向があるが、平城・相楽ニュータウンでも、地区ごとの入居時期に最大で16年ほど差が見られるため、地区ごとの居住者の年齢層の偏りが異なっている(図1)。そのため、地区ぐるみのまちづくりを進める上で、世代間のつながりや連携が必要になってくると考えられる。

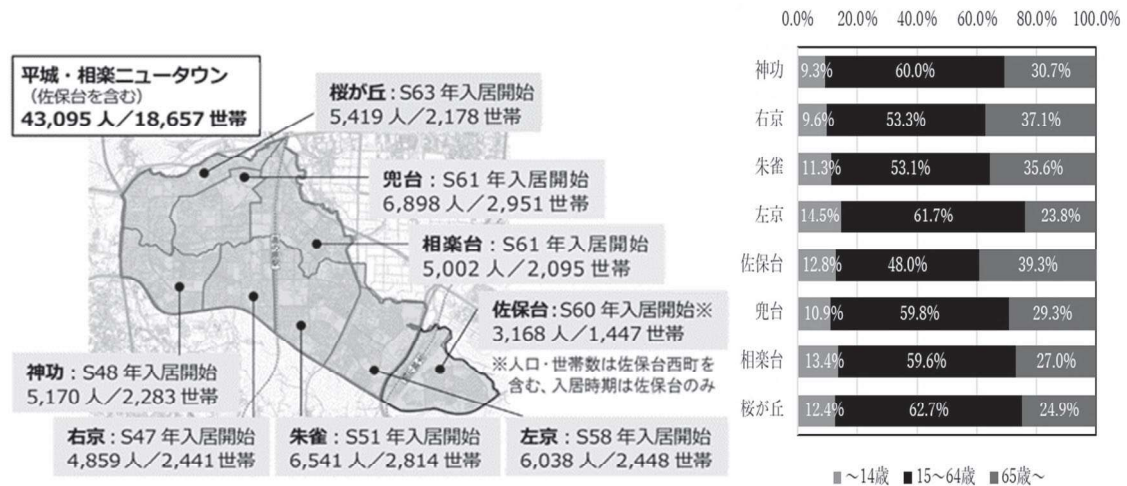


図1 平城・相楽ニュータウン地図と地区ごとの人口・世帯数
 (左図:「平城・相楽ニュータウンパワーアップビジョン検討会議調査検討報告」, 2021, 3頁、
 右図: 地区別3世代別人口割合<令和2年国勢調査>)

(2)平城・相楽ニュータウン内の公園の現状

平城・相楽ニュータウン内の公園について、開発を行ったUR都市機構のホームページによれば公園の総面積が約50haあり、40以上の公園と緑地がある。また、平城・相楽ニュータウンパワーアップビジョン検討会議のアンケート・ヒアリング調査によれば、平城・相楽ニュータウンでは公園が地域で人と関われる場の一つとして捉えられている。このように、平城・相楽ニュータウンでは豊かな自然やそれを楽しむことができる公園等が整備されており、公園は地域の方にとってつながりの場となっていると考えられる。

(3)奈良市トライアル・サウンディング

奈良市都市整備部公園緑地課と都市政策課へのインタビュー調査(2022年12月実施)に加え、奈良市ホームページによると、奈良市トライアル・サウンディングは、奈良市公園マネジメント基本計画に基づき、「公民連携で一層柔軟に使いこなす新たな発想や仕組みを取り入れ、個性と魅力ある公園空間を創出し、地域コミュニティを活性化させること」を目的としている。2022年度は平城・相楽ニュータウンにある5か所の公園を実施対象として、現在(2023年1月)までに合計16回のイベントが行われている。

このような奈良市トライアル・サウンディングの目的「地域コミュニティの活性化」が本研究の目的と合致しているため、本研究ではトライアル・サウンディングに参加し、イベントを企画実施しながら調査(アクションリサーチ)を行った。

2-2 アクションリサーチの企画

(1)神功地区の特徴

トライアル・サウンディングの対象地の1つ、平城第4号近隣公園のある神功地区は、隣接する右京地区に次いで入居時期が早い(図1)。また、令和2年度国勢調査より当地区では持ち家・UR賃貸住宅・民間賃貸住宅が存在している。神功地区では町丁目ごとに住宅の種類や開発時期が異なるため町丁目間に世代の偏りがみられる(図2)。このため、神功地区の地域コミュニティの活性化を目指すためには、多世代間の交流が必要であると考えら

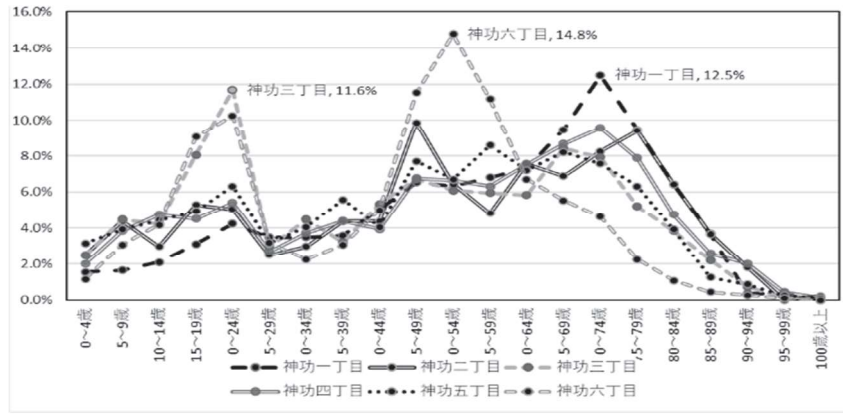


図2 神功地区・町丁目別 5歳階級別人口(令和2年度国勢調査)

れる。

また、神功地区では、自治連合会をはじめ地区社会福祉協議会や自主防災防犯協議会などの住民の組織が地区内の地域活動を担っている。そして神功小学校と右京小学校と平城西中学校が2022年4月から小中一貫校の奈良市立ならやま小中学校に統合となった。

(2) アクションリサーチの進め方

アクションリサーチでは、イベントの企画実施のプロセスやイベントによる効果を明らかにすることを目的とした。

現地調査や先行する活動の視察を通し、イベント実施場所の選定やイベントの企画案の作成を行った。さらに、今回イベントを実施した平城第4号近隣公園の管理主体である地域団体等と打ち合わせを行ったうえで、2回のイベントを実施するに至った(表1)。

その過程で、「多世代が交流する」ことを主な目的に、神功地区・右京地区で公園を活用し、子どもを対象としたイベントを企画した。これは、町丁目間の世代の違い、小学校の統合等を考慮したためである。そして、イベントは目的にあわせて2回に分けて実施した。1回目は子どもが参加しやすい遊びを通して子どもと地域の交流を生むこと、2回目は1対1で対話できる遊びを通して親子と地域の交流を生むことを目的とした。

表1 イベントの企画実施のプロセス

月日	活動内容
4月	まち歩き(神功地区・右京地区の公園を実際に見て特性等を把握する)
5月	先行する奈良市トライアル・サウンディング活動の視察(平城第4号公園)
6月以降	地域の方へインタビュー、以降企画について4回程度打ち合わせ
9月24日	イベント1回目実施・調査
10月9日	イベント2回目実施・調査

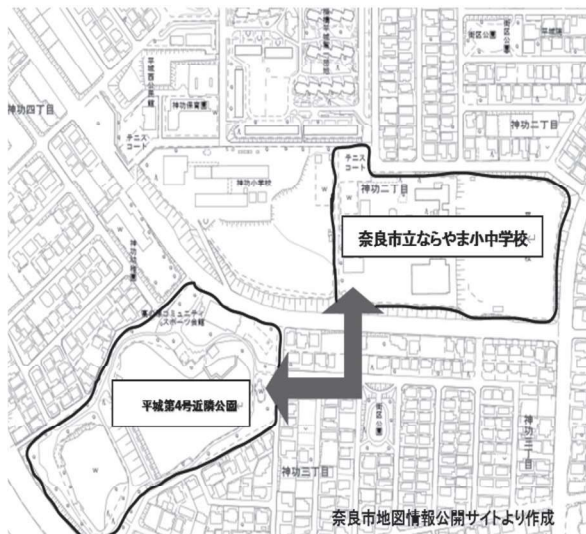


図3 平城第4号近隣公園とならやま小中学校位置図

また、イベントを開催する公園は、平城第4号近隣公園とした。その理由としては、ならやま小中学校が近くイベントの対象となる神功地区・右京地区の子どもが参加しやすいと思ったためである(図3)。また2回目のイベントはこの公園で行われる神功秋祭りと同様開催が可能となるからであった。以上の理由からこの公園が最も集客が見込めると考えた。

(3) アクションリサーチの概要

以上のプロセスから、「多世代が交流する」ことを目的に、9月24日と10月9日の計2回イベントを開催した(表2)。そして両方のイベントで子どもや保護者、スタッフに向けた3つのアンケートを用意し、本イベントの評価や普段の公園の利用状況、普段の地域でのつながりについての項目を設定し、調査を行った。

表2 各イベントの概要

	1回目 あそび再発見&イケコでおにご	2回目 すごろくのまち
日時	9/24(土) 9:00~12:00	10/9(日) 11:00~13:00
目的	子どもたちが自主的に遊ぶきっかけを作る・公園で非日常的な遊びを体験する	子どもたちだけでなく、保護者も地域の人と交流する
対象	未就学児~小学生	中学生以下
内容	子どもたちが親世代のあそびを体験する・非日常的な遊びを体験する	自身がすごろくのコマとなり、クイズ、ミニゲームをしながらゴールを目指す
協力団体	神功地区自治連合会・神功地区社会福祉協議会・子どもe場所ネットワーク・右京地区万年青年クラブ・なら学生ボランティア団体UniCom等	神功地区自治連合会・民生委員・なら学生ボランティア団体UniCom等



図4 各イベントの当日の様子

第3章 公園を活用した多世代交流の実践と結果

本章では、3章で企画したイベントの参加者を対象に実施した3種類のアンケート調査(計2回)の結果をまとめる。

3-1 調査の概要(目的・対象・項目等)

- ・ 調査の目的：イベントの多世代交流に関する効果や公園利用に関する実態を確認する
- ・ 調査対象：イベントに参加した子ども、その保護者、スタッフ
- ・ 調査項目：①イベントの満足度、②多世代交流ができたか、③普段地域とつながりは

あるか、④普段公園を利用しているか

3-2 調査対象者の特徴

イベントには、各回に70名を超える子どもが参加し、その約半数の保護者が訪れた。また、両日とも小学3年生の参加が最も多かった。

表3 1回目イベント「あそび再発見&イケコでおにご」の参加者内訳

子ども	計78人	1年9人 2年14人 3年16人 4年12人 5年9人 6年7人 その他4人
保護者	計37人	20代以下0人 30代19人 40代14人 50代3人 60代以上0人 未回答1人
スタッフ	計31人	地域の方15人 小中学生4人 大学生(県大生を除く)7人 県立大学生5人

表4 2回目イベント「すごろくのまち」の参加者内訳

子ども	計76人	1年12人 2年10人 3年16人 4年12人 5年8人 6年4人 その他12人
保護者	計32人	20代以下0人 30代19人 40代9人 50代2人 60代2人 70代以上0人
スタッフ	計12人	地域の方8人 大学生(県大生を除く)4人

※開催時間について、2回目は雨天により2時間繰り上げて開催

両日とも子どもの50%以上が神功地区からであり最も割合が高かった。次に右京地区が1回目は30.8%、2回目は26.3%であった。2回目は兜台からきた子どもが5.3%いた。ほかにも、奈良県立大学生以外の大学生がスタッフとして参加した。

3-3 調査結果と分析

(1)参加者の評価

1回目の「あそび再発見&イケコでおにご」に対する参加者の評価をみると、子どもは、「とても楽しかった・楽しかった」が80.8%、2回目は100%であった。また評価の理由として、1回目は「友達と遊べたこと」、2回目は「遊びそのものが楽しかった」との回答が最も多かった。また、保護者は、1回目は、「とても良かった・良かった」が97.3%、2回目は100%であった。その理由として、1回目2回目ともに「遊びの内容」との回答が最も多かった。

以上から、子どもも保護者も遊びの内容に対する評価は両日ともに高く、子どもの評価の1回目と2回目の違いは、遊びの内容に影響していることがわかった。

(2)交流の実態

イベントにおける交流の実態を会話から把握すると、子どもの回答として、1回目は「友達」が73.1%で最も高かった。2回目は「話したことのない大人」が38.2%で最も高かった。また、保護者は、1回目は「よく知っている人」が62.2%で最も高かった。2回目は「初めて知った人」が46.9%で最も高かった(表6)。

これらの項目から、遊びの内容と実際の交流実態には関連性があるとわかった。これは、2つのイベントには内容の違いがあり、交流の仕方が異なったからだと思われる。1回目は自主性に重きを置いた交流を、2回目は1対1での交流を目的としていた。

(3)公園やイベント参加の意向

普段の公園の利用実態をみると、子どもの回答として、1回目は「ときどき来る」が46.2%、2回目は56.6%で最も高かった。保護者の回答においても、1回目は「ときどき来る」

表5 「あそび再発見&イケコでおにご」に対する参加者の評価

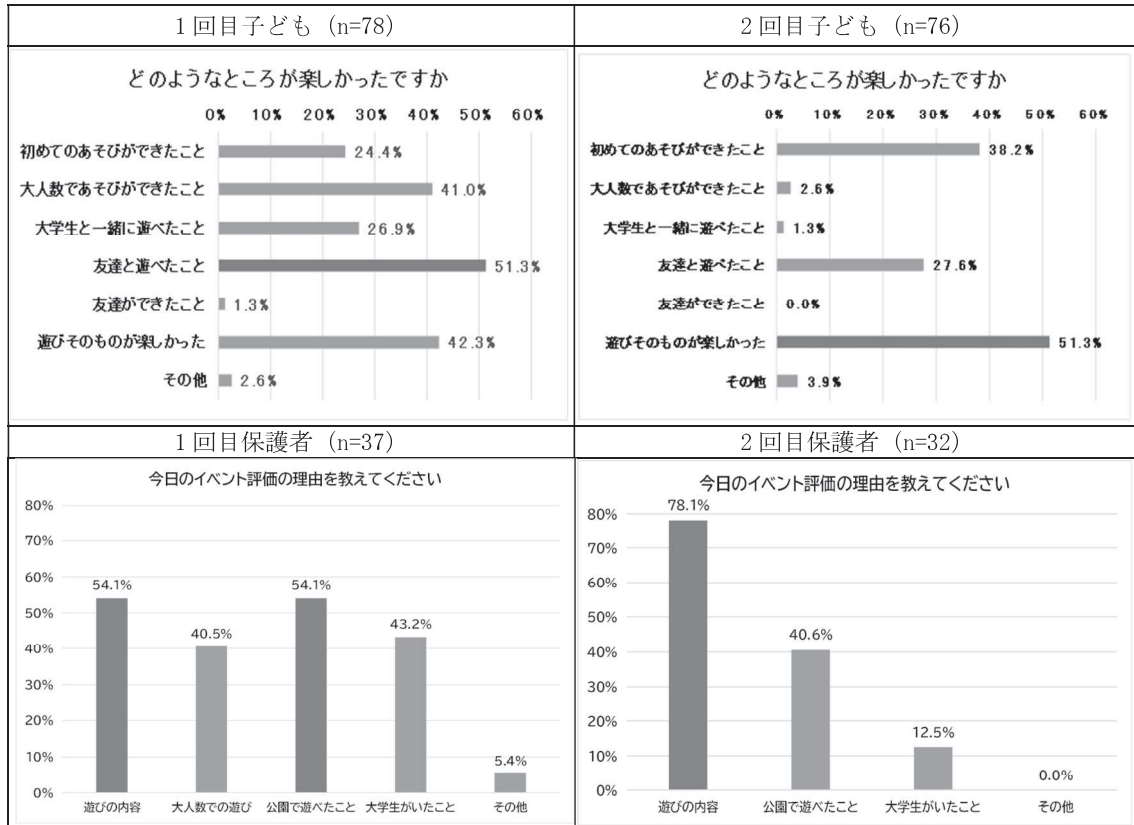
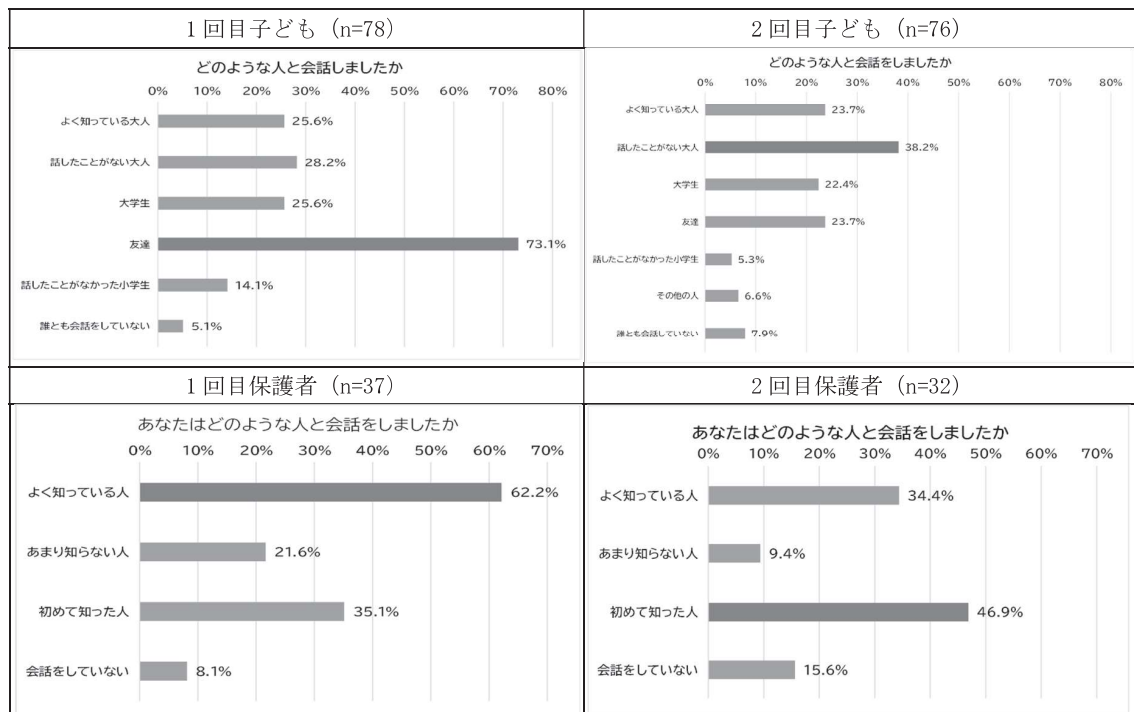


表6 イベントにおける会話相手



が51.4%、2回目は50.0%で最も高かった。さらに、今回のイベントを通して今後の公園利用の意向をみると、子どもの回答として、1回目は「利用したい」が97.0%、2回目は100%であった。保護者の回答においても、1回目は「利用したい」が95.0%、2回目は97.0%であった(表7)。

表7 公園の利用実態と今後の利用意向

	普段の公園利用の実態	今後の公園利用の意向
子ども(1回目 n=78、2回目 n=76)	ときどき来る 1回目(46.2%) 2回目(56.6%)	利用したい 1回目(97.0%) 2回目(100%)
保護者(1回目 n = 37、2回目 n = 32)	ときどき来る 1回目(51.4%) 2回目(50.0%)	利用したい 1回目(95.0%) 2回目(97.0%)

さらに、今回初めてこの公園を利用した参加者は10人いたが、10人とも「今後もこの公園を利用したい」と回答していた。

このようなことから、イベントによる公園の活用は今後の利用意向の促進につながったといえる。

第4章 地域のつながりづくりのための活かし方と課題

本研究では、神功地区・右京地区における公園の利用実態やつながりについて明らかにし、つながりを生む公園の活かし方とその課題について考察することを目的とした。

(1)公園本来の役割と課題

はじめに、公園本来の役割には、オープンで誰でも利用できるということが挙げられる。そして、今回のイベントではその特性から実際に新しい交流が生まれていた。本研究では神功地区の公園を対象としたが、神功地区とともに右京地区の子どもやスタッフなど、地区を越えた参加も多かった。これは、ならやま小中学校での広報や平城・相楽ニュータウンまちづくり50周年事業としての広報があったためと考えられる。一方、公園を活用する上では天気の影響が課題であった。また、管理団体との交渉等も課題となり得る。

(2)イベント会場としての公園の活かし方と課題

次に、イベントによる公園の活かし方と課題として、主に次の3点のことがわかった。

①子どもを対象とすることで、保護者や地域の方、学生が関わるきっかけとなる。

例えば、イベントの対象を子どもとしたことでその保護者が一緒に参加し、大学生、地域の方といった多世代交流が可能になった。また、神功地区・右京地区ではもともと子どもと地域の大人とのつながりがあった。しかし、地域によって子どもと大人の交流状況は異なっているため、つながりを事前に把握し、企画内容に反映させる必要がある。

②イベントの内容で異なる交流が可能である。

例えば、表6の調査結果より、大人数の遊びができた1回目のイベントでは、子どもは友達との交流、保護者はよく知っている人との交流が主であった。一方、親子で参加できた2回目のイベントでは、子ども、保護者ともに話したことのない人と会話する機会があったことが読み取れる。よって、つながりを生むためのイベントを行う際には、どのような交流の機会を持たせるかを留意した企画が必要であると思われる。

③大学生という新しいプレイヤーが多世代交流の一部となり、さらなる交流を促す。

本研究において奈良市トライアル・サウンディングという機会を頂戴した。奈良市公園緑地課の方からは「大学生が主体となって地域の方が協力し、参加対象の子どもたちに30代や40代等の保護者の方もついてきたという点で、多世代交流の場として良かった」との言葉をいただいた。このように、大学生がつながりの拡大や多世代交流において果たす役

割は大きいと思われる。しかし、大学生は活動の継続性の点で課題があり、複数の学年の学生による取組が求められる。

(3) 今後の展開に向けて

つながりを生む公園の活かし方とその課題について、以上の点を踏まえると、今後イベントにより公園を活用していく際には、多様なプレイヤーによって積極的に交流を促す企画を実施することが重要である。また、プレイヤーを多様化する方法として、トライアル・サウンディングのような自由度の高い企画を活用する・新たにトライアル・サウンディングに代わるような方法を模索すること等が考えられる。

参考文献

第1章

赤澤宏樹・池邊このみ・入江彰昭・小野 隆・金岡省吾・金子忠一・佐藤留美・竹田和真・中村忠昌・西山秀俊・林まゆみ・平松玲治・福岡孝則・藤本真里(2020)『パークマネジメントがひらくまちづくりの未来』マルモ出版

第2章

長田攻一・田所承己・柄本三代子・小村由香・加藤篤志・渋谷望・鈴木俊介・道場親信・吉野ヒロ子(2014)『〈つながる/つながらない〉の社会学—個人化するコミュニティのかたち』弘文堂

奈良市・木津川市・精華町/独立行政法人都市再生機構/関西学術文化研究都市センター(株)/公益財団法人関西学術文化研究都市推進機構「平城+相楽100 つぎの50年に向けて」平城・相楽ニュータウンパワーアップビジョン検討会議<https://www.kri.or.jp/news-event/img/PUV2020_results_01.pdf> (参照 2023-2-9)

UR都市機構「けいはんな Takanohara 壮大な街づくり」UR都市機構ホームページ<<https://www.ur-net.go.jp/west/case/takanohara/town/index.html>> (参照 202-2-2)

奈良市都市整備部公園緑地課。「【令和5年度の継続が決定しました】公園をお試し利用したい事業者や団体を募集する『トライアル・サウンディング』を実施します」奈良市ホームページ<<<https://www.city.nara.lg.jp/site/parklife/137560.html>> (参照 2023-2-9)

奈良市都市整備部公園緑地課。「奈良市公園マネジメント基本計画」.奈良市ホームページ<<https://www.city.nara.lg.jp/uploaded/attachment/153451.pdf>> (参照 2023-2-2)

国土交通省都市局公園緑地・景観課「新たなステージに向けた 緑とオープンスペース政策の展開について」国土交通省ホームページ<<https://www.mlit.go.jp/common/001152250.pdf>> (参照 2023-2-2)

国土交通省都市局公園緑地・景観課「令和3年度 都市公園利用実態調査 報告書(抄)」国土交通省ホームページ<<https://www.mlit.go.jp/toshi/park/content/001519624.pdf>> (参照 2023-1-5)

国土交通省不動産・建設経済局土地政策課政策第2係「宅地供給・ニュータウン」国土交通省ホームページ<https://www.mlit.go.jp/totikensangyo/totikensangyo_tk2_000065.htmlpdf> (参照 2022-12-30)